

2015.03.27 『記録と記憶 — transcripts/memories』展 : オープニングアーティストトーク

藤崎了一

安瀬英雄 (代理・河西香奈)

新津保建秀

吉楽洋平

田附×KYOTARO

藤崎了一

藤崎（以下：RF）：初めまして。藤崎了一と言います。僕は元々素材を扱うのが好きで、石膏を1mmのワイヤーにスプレー状に塗装して10cmの体積をかけるような作品も制作してきました。今回は、陶器の皿の上に油を入れて、そこに水性の墨や洗剤など色々な液体を注ぎ、攪拌し、揺らすことで起きる様々な現象を捉えた、写真作品を展示しています。

僕は素材にハマることが多いのですが、そのような執着やハマること、中毒になることを英語で「ADDICT」といいます。今回の作品はPhoto ADDICTです。3mmの厚さの中で起こる現象を6000枚近く撮りました。1cmの距離まで近づいて3mmの中で起きている現象を集中しながら撮影し、現象に寄り添いながら制作を進めていきました。写真の中に見えるものはすべて水性か油性のものです。

—— これは何でできていますか？（「colored oil 001」を指差しながら）

RF: あまり種明かしをするのは・・・（苦笑）

—— （作品に写っている）この丸いのは？

RF: それは気泡ですね。

—— 他の作品には、このような気泡は写っていないですね。

RF: そうですね。皿を置いて何かで突っついたりしながら撮ることもありました。

—— 制作中は何を考えていますか？

RF: 何も考えていないですね（笑）。制作のときに大事にしているのは、シャッターを押す瞬間に思いついたことを言葉に変換しないようにすることです。「ここに赤がほしい」とか、「こうなった方がいいだろうな」など言葉で考える前にシャッターを押すことを大事にしています。言葉通りに撮影してしまうと、どうしても予定調和を目指してしまい、そうすると面白くない作品になってしまう。それを危惧し、そういった考えから解放することで、自分も物体の可能性に没頭でき、広がりを感じながら作品を作っていくことができると考えています。

—— 石膏作品も同じようなことを考えて制作されるのですか？

RF: そうですね。石膏の作品は1mmのワイヤーを4mの天井から吊るして制作します。

—— 写真の場合は「シャッターを押す」という瞬間がありますが、石膏作品の場合はひたすら何時間も石膏を吹き付けるんですよね？

RF: 一ヶ月間ですね。

——一ヶ月間、無心になるというのは生物的に成り立つんですか？

RF: 言葉で表現すると「無心」になりますが、ワイヤーに石膏を塗装し堆積させ続けるときに気を付けていることは、「余計なことを考えない」ということです。例えば、「ここにもう少しポリウムが欲しい」、「こうなった方がきれいだ」ということは考えず、できていく形に感激しながら制作を進めていきます。

——モノに委ねるということですか？

RF: そうですね。現象に委ねる形で進めていきます。

——撮るとき、構図などは意識されますか？

RF: シャッターを押す瞬間は一切何も考えないです。

——トリミングもしない？

RF: そういったことは一切しません。元々写真は好きで、大学生のときも片手にカメラを持ちながら歩いて、ふとしたときに撮るということをずっと続けていて、一日に3~400枚撮ることが普通でした。それを現像するのがちょっと大変でしたが。

——量が振り切れてますよね（笑）

RF: そうですね。「やりすぎ」といつも言われています。仕事には向かない性格だと思えます。でもこの性格は逆に作家としては強みになるので、それを利用しようと「ADDICT」に気が付き、作品の形になりました。

——ありがとうございました。何か質問したい方はいらっしゃいますか？

客A: 今回の作品はどのように印刷しているのですか？

RF: インクジェットプリント後に、UVカットのグロスラミネートを施しています。「オフグロス」という、反射せず傷も目立たないものもあるのですが、グロスラミネートだと濃い色が締まって見えて、明るい色がなお明るく見えるということで採り入れました

客A: 凄く色が鮮やかに感じます。

RF: それは白い陶器の上を1cmの距離でフラッシュを焚いて撮影しているからですね。フラッシュを焚くと陶器の表面に反射して、色の質感が透き通って見えるようになります。そうすると素材感や陰影が飛び、色のイメージだけが飛びこんでくるようになりますが、これは偶然発見したことでした。

9年前、今回の展示作品の原形となる作品を制作していましたが、その撮影を進めていたある時、勝手にパカッとフラッシュが焚かれたんです。自分が見ている現物とはまったく違う色が撮影した写真からそのとき顕れて、それが凄く面白くて。そこからどんどんハマっていきました。

今回は企画者の方から、凄く綺麗だから9年前の作品を展示したいというお話を当初は頂いてたのですが、僕としては新しく新鮮なものを展示したいと思い、更に多様な色彩を混ぜながら、9年前以上に何事にも限定しないやり方で制作しました。

安瀬英雄（代理・河西香奈）

——次にご紹介するのは安瀬英雄の作品です。安瀬さんはご自身のポリシーでレセプションに出席されていないため、以下、私の解釈となりますが、彼の作品についてご紹介をさせていただきます。

彼は工芸出身、その後は絵画制作をやっていた作家ですが、3年ほど前から写真作品を発表しています。ですが写真の作品というよりも、「現代の写真の概念」をコンセプチュアルに見せている作家だと解釈しています。というのも、写真と言えばカメラがありフィルムがあり、切り取った決定的瞬間の像を浮かび上がらせるもの、という従来の定義がありますが、もっとフラットに「現代における写真とは？」ということをご一般人レベルで考えると、iPhoneなどのタブレットで写真を撮ってSNSにアップしてコミュニケーションに活用する、というのが、現在最も流通している写真の形ではないかと思うからです。

この《Stripe (50Hz)》シリーズもすべてiPhoneで撮られています。蛍光灯の光をデジタルカメラで撮ると、縦縞の線が入るフリッカーという現象が起きますが、そのような現象を意図的に撮りためて、《Stripe》シリーズと名付けています。「50Hz」という副題がついていますが、これは商用周波数が50Hzの地域、つまり関東地方に本人がいるときに限り、この作品を1日1枚Twitterにアップロードしているからです。例えば、商用周波数が60Hzである関西地域にいるときにはこの作品は撮っていません。つまりは、東京電力の作り出す光の記録を毎日記録している、ということになります。

また、床に紙が4枚置いてあるのをご覧いただけますでしょうか。各作品に、この4枚のデータシートがついてきます。カメラであれ、iPhoneであれ、デジタルで撮影された全ての写真にはこのようなEXIFデータがついてくるのですが（紙を1枚持ち上げる）、ここにはレンズの種類だったり露光設定だったり、様々な情報が記録されています。彼はそのデータを可視化させていて、「世の中にアップロードされている全ての写真にこのようなデータがある、しかし皆は気づいていない」ということをコンセプチュアルに見せていて、やはり現代美術作家のアプローチだと思えます。

また別の紙には、Yahoo! ニューストピックスとTwitterのニュースフィードのアーカイブがまとめられています（他の紙を持ち上げる）。つまり作品の撮影時間に、「世の中で何が起こっていたか」を示しています。例えばこの「2月18日渋谷区」の作品の場合は、撮影とほぼ同時に「プロレス 仲田龍さん死去」というニュースが掲載されたそうです。別のシートには作品撮影場所の位置情報も印刷されています。つまりこれら4枚の情報シートは、視覚的にはこの壁に掛かっている作品とは異なりますが、情報としては「同価値」とも言えます。まさに現代の写真の在り様を体現している作品だと思えます。

新津保健秀

新津保（以下：新）：今日はお越しいただきありがとうございます。今回僕が出展している作品は、これまでドキュメントということ意識して撮ってきたデータの中から構成しています。こちらの壁面にあるものは『思想地図β』という雑誌で、震災以降主に福島やチルノブイリ、福島以外の東北地方の県に取材に行ったときの画像を圧縮して映像化した作品です。ディスプレイの左右の作品は2013年に福島第一原発を取材した際の画像データから選択し、プリントアウトしたものです。

黒板の写真は、今日もいらしていただいています。複雑系科学の研究者で東京大学の教授の池上高志さんがレクチャーしている際の板書を記録したものです。これは去年博報堂デザインから出たMTMDFという電子書籍の制作過程で撮影された写真の中から選びました。画像の依頼はそのようなところからきていますが、それぞれの作品の意図していることは、写真の中のフレームやアーカイブなどについて、両方の壁面（福島の作品の壁、黒板の作品の壁）に共通しているのは、イメージの多層性と支持体の関係を、今探っているポートフォリオのなかから抽出しているという点です。

この写真（《「監視中 映像を監視・録画しています」「フェンス・カメラ等の撮影はしないでください」）について補足します。福島第一原発の撮影に行ったときに、施設内は自由には歩き回れずマイクロバスで東京電力の広報の方と一緒に移動して行くのですが、そこで厳しく言われるのが「フェンスを撮らないでください」ということでした。それはなぜかと言いますと、フェンスには監視カメラが設置されていて、発電所内の警備施設に相当するものは一切撮らないでほしい、ということです。それでも写ってしまうことがあるんですが、一度検閲を受けると、写っているものはすべて削除されてしまうんですね。これは削除されなかったんですが、写真の下の方にフェンスがあって、たくさん監視カメラが設置されているようでした。こちらがただのフェンスだと思っても、東電の方からするとどこに監視カメラがあるかということがわかっているの、一切撮らないように言われます。普通撮影するときには自発的にフレーミングを決定するんですが、この中においては常に監視カメラを回避するようにフレーミングが決定されていきまして、そうしていたら奇妙な画像が撮れた、というところなんです。

—— 先程藤崎さんのトークでも「現象に身を委ねて制作」という話がでました。

新: そうですね。現象というより条件ですね。その中で反射的に撮っていくことになりま。このときの取材で一番引っかけたのが、この画像で、今はこの画像が持っている色々な構造を自分なりに解析して、次に生かせられればと思っています。

吉楽洋平

吉楽洋平（以下：YK）：吉楽です。よろしくお願いします。奥で展示しているのは2010年に撮影した海辺で花火をしている人々の写真です。花火というのは誰もが経験したことのある身近なものだと思うのですが、肉眼や映像で見ると、写真で一瞬を切り取って見るのとは視覚的な経験という意味で違いがあるなと思い、興味が湧いたので制作しました。

夜の海は本当に真っ暗で、実際自分が撮影をしても何が写っているのかわからないことが多いのですが、そこが写真的なモチーフとして面白いなと思い、シリーズとして制作していきました。撮影のスタンスとしては、写っているみなさんは実は知らない方々で、見知らぬ人々のある種のパフォーマンスを記録するという感覚で、少し引いた感じで、客観的な視点で撮影しました。

—— 花火をやるときって物凄く楽しい感覚だと思うんですが、実際に撮影する際はどのような感情ですか？

YK: 感情的には淡々としていますね（笑）。本当に一瞬のことなので。

—— 写真制作ではよく、最も気持ち良い瞬間というのは撮影しているときよりももっと後で、写真がプリントされて出来上がったときであるなどと耳にしたりします。

YK: そうですね。作業としても、どちらかというとなら撮影よりも選ぶ作業の方が重要です。千本ノックのような感じで、毎日毎日やりました。

—— 一回の花火のシーンで何枚くらい撮っているのですか？

YK: 打ち上げ花火の時は10枚くらいです。

—— その中に画になるものが一枚あるかないかという感じですか？

YK: そうですね。3000枚くらい撮って、作品になるのは50枚くらいですね。

—— ありがとうございます。何か質問はありますか？

客B: どのくらいの距離から撮ってるんですか？

YK: 10mくらいです。真っ暗なので被写体の人たちには気づかれないのですが、花火が上がった瞬間にパッと明るくなるんですね。その瞬間に気づかれるので、その場を逃げたり。（笑）

RF: 10mという近さの割には、50mくらいの距離感を感じますよね。

YK: そうですね。ちょっと広角のレンズを使って撮っています。

RF: この作品から凄く神聖なものを感じます。その空間に立ち入りながら、花火の光で周りが明るくなる瞬間を捉える、というのがすごく神聖な行為に感じるのですが、そのような感覚はありましたか？

YK: そうですね。儀式とかで、人間が火を使い始めた時とかにこういう感覚だったのかな、というのは実際ありました。

RF: よく見ると、中にはいかつい顔の写真なんかもあって、実際の撮影現場はシリアスな空気だったのではと思います。作品自体も神聖な行為というか、何か神道に近いような感じがしますね。

YK: シンメトリーの作品が多いので、そうかもしれないですね。

RF: 撮るときに何かルールはあるんですか？

YK: ルールは、なるべく人が真ん中にあることです。最初は真っ黒でRGBがゼロになるので、黒を全体に足そうかと思ったりもしました。真っ暗な中に人がポツンといるというイメージです。ただ、写真ということを考えると撮ったそのままの方がいいなと思い、最終的にこのような形になりました。

田附×KYOTARO

田附勝（以下：MT）：田附でございます。で、こちらがKYOTAROです。

KYOTARO（以下：K）：KYOTAROです。女なのですが。男の名前ですみません（笑）

MT: まずは僕の方からお話をさせていただきます。『VICE Japan』でコラボ展をやりたいという話があり、お誘いがありました。『東北』という写真集があるのですが、これは2006年から2011年まで東北に通って撮りためた写真です。僕の作品の中心となるのがこのときの写真です。今の宮古市で旧川井村という小さな集落に夏屋鹿踊（なつやしかおどり）というのがあるって、その集落にはもう使われていない鹿頭があって鹿の仮面が保管されているんですね。そのお面の存在を知っていたので、現地に行って地元の方に踊ってくれと頼んで撮影させてもらいました。作品はそのうちの一頭のポートレートですね。

僕は、僕なりに写真の力を信じていて、今回であれば東北の力強さや神聖な信仰の強さが写真の中に込められていると感じていつも撮っているんですよね。それをもっと具現化する方法はないか、誰か他の人と制作をしたいと思ったときに、KYOTAROがいるなど。昔からKYOTAROのことを知っているんですけど、実は全然話したことはなくて。今回はKYOTAROとやりたい、そういうタイミングが来たのだらうと思って、KYOTAROに「写真を切り刻んでも何でもしていいから一緒にやってみないか」と頼んで、こうしてKYOTAROに描いてもらいました。で、KYOTAROさん。

K: 私は基本的に感覚的に制作することが多いのですが、色々な必然を経て仕上がった田附さんの作品に、写真の中にある記憶を、私なりに抽出するようなイメージで描いていきました。最初、どのような作品になるのかまったくわからなかったのですが、最終的に今展示されている絵に落ち着きました。

全くの手探り状態の中で制作を進めていったのですが、作り終えたときに、不思議な空間を醸し出すものに仕上がっていました。仕上がった作品は私の手からはなれ、作品として独立したという感覚がありました。現実にかかることは爆発の連続、インパクトの塊だと思っていて、数々の必然の中で生まれて来たこの作品を客観的に見ても、非常に不思議でしかも独自に力を放っていることを面白く感じました。

最終的に出来上がった作品を田附さんが東北の鹿を撮ったエリアに持って行き、そこでその作品の写真を撮影しました。そこで「自分たちは何をやっているんだろう」と考えたときに、この制作作業は儀式的なものなのではないか、という結論に至りました。結果的に、色々な意味も込めてConnect Ceremonyというコラボレーション名が浮かび上がったんです。全部、必然の羅列なんですよ。

MT: 鹿というモチーフは岩手にとってすごく大事なんです。出来上がった作品を鹿の生息するエリアに持ち込んで、山の中に置いて撮影しました。で、よく見るとあの作品の下の方には土とかがついてるんですよ。それでやっとコンプリートというか、作品が新たに

生き返った感じがします。写真の強さと、KYOTAROの画力の強さ、加えて自然の中からもらったものなど全部、ある意味、絵や写真それぞれでできることが合わさった作品だと思います。

——先ほどKYOTAROさんのおっしゃった「像が浮かび上がってくる」という表現は、実は一番写真的ですね。初めて写真作家ではない方からそのコメントが出てきたのは面白いなと思いました。

MT: そう。だから写真だと何か言葉にしなければいけないことを、絵を描く人がそれを絵で表現することに挑戦してくれて、かつ、僕の中でも写真の背後にあるイメージを汲み取って形にしてくれたので、面白いコラボレーションだったなと思います。